氏　　名	金　佳
学 位 の 種 類	博士（　言語学　）
学 位 記 番 号	博　甲　第　８４３０　号
学位授与年月日	平成　３０年　３月　２３日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	第二言語の音声・音韻習得理論の検証 −中国人日本語学習者の単母音習得を通して−

主　　査	筑波大学　教　授	Ph.D.（言語学）	竹沢　幸一
副　　査	筑波大学　准教授	Ph.D.（認知科学）	宮本　エジソン　正
副　　査	筑波大学　准教授	博士（言語学）	那須　昭夫
副　　査	筑波大学　准教授	博士（言語学）	松崎　寛
副　　査	筑波大学　准教授		佐々木　勲人

論　文　の　要　旨

1950 年代の「対照分析仮説」をはじめとして、母語と目標言語の関係性を論じる様々な第二言語習得理論がこれまで提唱されてきた。その中でも、母語と目標言語の「類似性」という観点から分析した Flege(1995)の「音声学習モデル(以下、SLM)」と Major&Kim(1996)の「類似性仮説(以下、SDRH)」は、近年の理論の主流となっている。SLM では、学習者の「同値分類」メカニズムの作用から、第一言語(L1)に似ている第二言語(L2)音は L1 にある音と同じものとして捉えられ、習得過程において一貫してその L1 音で代用してしまうため、習得の難易度が高いのに対して、新しい音の場合は L1 の中で代用するものがなく、L2 音を新しい音として認識するため習得の難易度が低いとされる。一方、SDRH も「類似性」に基づいた仮説であるが、習得の「難易度」という概念を批判している。たとえば、初級に当たる早い段階では、学習項目 A が学習項目 B よりできているとする。しかし、もし B の習得が十分に「速」く進むのであれば、上級の段階では B が A を上回ることも考えられ、段階によって難易度が異なる場合、A と B のどちらが難しいか判断し難い。この問題を解決するため、SDRH ではより母語に類似した項目は習得が遅く、より母語に類似しない項目は習得が速いという「速度」に注目することを主張している。しかし、類似性の概念が不明であることや、どのような検証手法を使うべきか、学習者の知覚と産出がどこまで予測できるかといった問題も残っている。

そこで、本論文では、中国人日本語学習者の単母音習得を通して、

(1)　日中対照に関する先行研究を整理し、「類似音」と「類似性」の判断基準について検討すること

(2)　理論検証における「検証対象」及び「検証手法」の注意点について検討すること

という２点から、第二言語としての音声・音韻習得理論を検証している。

本論文は、以下の 7 章からなる。

第 1 章　序論

第 2 章　先行研究と本研究の立場

第 3 章　中上級の中国人日本語学習者における単母音習得の実態

第 4 章　母語転移以外の要因分析及び両言語における類似音の特定

第 5 章　検証方法と検証対象に対する論考

第 6 章　音声的類似度に基づく音声・音韻習得理論の検証

第 7 章　総合考察

第 2 章では、音声・音韻習得理論を概観し、それぞれの理論の内容と問題点を議論している。特に、類似性に基づいて提唱された SLM と SDRH を中心にして、学習者の知覚と産出をどこまで予測できるか、実験や調査から得られたデータをどのように解釈すべきであるかという問題について、先行研究を整理している。

第 3 章では、中上級学習者の単母音の弁別能力、学習者が日本語母語話者並みの自然度をどの程度有するかについて調査している。そして、学習者が捉える母音類似度も習得状況の一部と考えられるため、類似度の判断調査を行い、学習者全体が捉えている類似度と類似音に関して確認している。その結果、単母音の弁別に関しては問題ないが、５つの単母音の発音は、韻律的要素が統制されていない場合、すべて母語話者並みの自然さが欠けてしまうことを明らかにしている。

第 4 章では、母語の代用の実態を調査し、ゼロ初級の学習者はほぼ全員/ei/、/ou/と発音すること、さらに教師と学習者の発音調査を通して、/ai/、/au/は「訓練上の転移」によるものであることを示している。類似度の判断基準については、ゼロ初級の学習者の場合、目標言語の母音体系がまだ構築されていないため、学習者の判断から「類似性」を定義するのは基準が不安定であり、学習者の判断を習得能力として考える場合、学習者が判断した「中間言語的類似度」で定義すると、学習者の基準で学習者のパフォーマンスを予測するという循環論法になりかねないという問題が生じる。そこで「音声的類似度」に基づき、両言語の母音体系から、５つの単母音の類似度を、/ア/・/イ/（同一音声）＞/ウ/（類似音声）＞/エ/・/オ/（新規音声）のようにみなしている。

第 5 章では、どのような検証方法を用いて、どのような属性の学習者を検証対象とするかについて検討を行い、以下の４つの方針を導き出している。

a.　特定の音環境による影響を避けるために、音環境が最もシンプルな単母音を対象とする。

b.　韻律的要素が評価に影響するため、統制させる必要がある。

c.　発音を評価してもらう際に、音韻判断と自然度評価を別々に行うようにする。

d.　/ai/、/au/で代用する学習者の場合、/ei/、/ou/との評価差により理論検証の結果が変わる恐れがある。

第 6 章では、/エ/を/ai/、/オ/を/au/で代用する学習者のデータを除いた上で、ゼロ初級と上級の中国人学習者の発音状況を把握し、第二言語の音声・音韻習得理論を検証する。その結果、ゼロ初級は、新規音声の/エ/ /オ/と類似音声の/ウ/の両方とも習得は困難だが、新規音声の/エ/、/オ/は上級では母語話者並みの自然度を有する。一方、類似音声の/ウ/は上級になっても母語話者並みの自然度にならない。つまり、発音習得において、類似音声は新規音声より習得が速く、SDRH の予測と合致すると結論づけられる。

第 7 章では、対照分析仮説や有標性差異仮説も含めて総合考察を行い、日中対照研究と習得研究の今後の課題と展望について述べている。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、中国語を母語とする日本語学習者の単母音習得の分析を通して、第二言語の音声・音韻習得理論を検証するものである。母語と目標言語が類似している場合、習得は容易なのか困難なのか、「類似」とは何か、「習得が容易」とは何かについては、様々な議論が展開されてきた。SLM は、習得に応じた学習者の認識の変容という観点が欠けており、「習得の速度」について議論すべきとした SDRH は、最も注目されている理論であるが、「初級段階で学習項目 A が B よりできていても、上級段階で B が A を上回ることも考えられる」という点については、SDRH 提唱者の Major＆Kim 自身も実証的なデータを示せておらず、初期において評価得点の高い項目の「速度」の傾きが鈍くなるのは、単なる天井効果によるものと批判することもできてしまう。さらに、その「類似性」は何を基準にどう決めるのかについても、学界の見解が一致しているとは言い難い状態である。

著者はこの問題を解決するため、まず先行研究を整理して「類似」を定義するところからはじめ、学習者自身による「類似」の評価を取り入れることは循環論法になるため排除し、音声的類似度によるのが妥当であるとしたのである。また、教師による誤った指導の影響を受けた学習者の発音も排除し、統制された均質なデータを元に分析を行うことを重視している。その結果、新規音声の/エ/、/オ/は上級で習得されるが、類似音声の/ウ/は母語話者並みの自然度にならない、つまり、SDRH の「類似音声は新規音声より習得が速い」という主張を支持する結果が得られた。一連の実験の手続きや統計処理の方法については非常に綿密な議論を経て用意され、結果の考察も妥当なものであると評価できる。

しかしながら、今回得られた結果は、あくまで単独の日本語五母音の解釈であり、理論の基礎として他現象に援用できるものかどうかは不明である。たとえば、音節単位で学習を行う場合、特に/ウ/は隣接する子音の影響を受けた異音の幅が大きく、母音を混同する可能性も大いにある。また、類似音声の/ウ/は習得が遅いという結論だが、円唇性と舌位置が関与する音色の習得が難しいところから、消去法的に相対的に「中程度」の「類似音声」と解釈した可能性もある。母語話者評価も、評価者の属性や教示次第で発音の自然さの結果は変わりうる。何をもって「習得された状態」と見なすのかについての更なる議論が必要である。

本論文には、上記のようにいくつかの問題が見られるものの、論文全体としての完成度は非常に高く、示唆に富むものといえ、今後の研究の継続と発展が期待される。以上により、本論文は、言語学・音声教育学研究において高い学術的・教育的価値を有するものであると評価することができる。

2　最終試験

平成 30 年 2 月 1 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格

を有するものと認める。